



第七卷

亞細亞時報

July 30, 1927

私心私語

藝術は窮屈なものである。藝術は高い處に置かねば
 ならない。藝術には持けさが入り、
 氣品があり、命がふければ
 ありそめて生命がふければ
 藝術家の持つ深い深い人
 生への悩みはより現はれ
 たる作品とあつて現はれ
 るが、その興ふる處は一
 つの樂しみであらねばか
 らぬ。何故かうれしみは
 一つの安心の地であり
 世の人が求めつゝある良
 いものゝ一つのであるか
 ら、
 (堯民)

木曜日

相心

角笛

雨の滴を聞きながら、ストーブの前にて居ります。と長い冬の間、爐邊の重誼が、数々あります。幼い日の心を捉へた、神秘と敬馬具の世界が、目を眩めて、憧れた夢の國が!! 因長敬の念を以て眺めた幻想の國に、生きる小供、走はほんと、うに、奇蹟であります。現実への夢を、破られたものは、神秘の凶怖に、目撃したものは、甘美の悦楽を、失って、不測の苦惱を、抱えなければなりません。

金曜日

向題に煩される度毎に、暗い自己否定に、迫られます。それは、自ら自己の力を、削つて、苦ししいもの、有りませうが、慰ふ私は、私自信の、要求の力に、抑れて居ります。今日の日の私の生活は、自己の本然の感情から、感徴する、断が、ありませぬ。直の勇者は、瞬間の、斯の情熱を、完全に、攪き、みながら、生きて行く、で、せうが、主気、地、なく、自ら、リ、レーションした、私は、嘆きながら、生活の、向上を、阻害する、自己否定の、中に、悲しみの、影を、残して、行きます。

日曜日

小春日和のやうな陽光を浴びながら、友の明い話に聞

土曜日

夕食の終わったH-I-Tとストーブを囲みながら、私は、私の話を、傾けて居ります。主の愛は、何かに、尋ねた、I-Tの、質問に、のびながら、答へて居ります。「永久に、忘れ得ない、慰め、の、記憶を、人の子の、最も、純不愛は、親の、心で、せう。心の、周囲に、暗闇の、積、作、つ、る、人、を、心、の、奥に、お、か、か、冬、の、間、の、土、中、の、種、子、の、ように、潜、んで、居、り、ま、す。そ、し、て、一、度、傳、い、人、間、生、活、に、対して、覚、識、が、目、醒、め、る、暗、闇、の、鼓、が、必、に、破、れ、て、取、り、去、ら、れ、哀、傷、と、か、つ、り、溢、れ、る、と、せう。其、の、時、の、唯、一、の、慰、め、を、私、が、親、の、愛、で、す。そ、れ、は、常、に、小、兒、の、称、ふ、純、不、愛、情、を、以、て、生、き、て、行、く、人、に、り、み、思、は、れ、る、も、の、で、せう。人、間、の、強、大、な、力、が、現、現、の、中、に、も、人、間、の、力、の、小、鳥、の、や、う、な、微、弱、を、認、め、て、小、鳩、の、や、う、に、親、鸞、に、身、を、托、して、至、安、の、心、を、求、める、の、で、す。主、の、愛、の、聖、典、に、無、限、と、絶、對、の、力、が、あ、り、ま、す。I-Tの、聲、が、括、は、れた、唇、が、再、び、開、か、れ、ま、す。そ、の、時、に、は、れ、ぬ、涙、も、含、ん、で、ま、す。そ、の、時、に、は、れ、ぬ、涙、も、含、ん、で、ま、す。」



×冬小品

×ワ歌

空は、
冬だ
街と、
冬だ

退屈した
愛の
顔、
顔、

硬い風が
窓ガラスを叩く

×傷乱した笑ひ

笑った
笑った

×ワ歌

笑った

—屍体さとりまゝと異様な笑ひ—

笑った

笑った

笑った

—屍体がぐるりて傷乱した笑ひ—

出て来い！

誰れだ！

死だ！

死だ！

~~~~~フリーオー~~~~~

四ツツ歌

三太郎

○昨日まで羨ましがかりし恋ふれど何故かみはくし解ぞめに似て。

○恋とひ愛となえむその音にや、つかれ来ぬ女みにくし。

○かまへに恋しかりける君ふれど疲れて見ればたゞの女子かぞ。

○恋とひ歌ととえしわが言の哀れは多かりし恋ふを今は。









矛盾の呻吟の中から 七子

「生れたる詩人」てア弥氏に

水底に眼の無き魚の棲むといふ

眼がみえぬ魚の棲むといふ

近頃私は前の歌の意に似した感に心を惹かれつつあります。まことに私の悲劇は人間本末、意識に透つたたを無意識の衝動が動かすものなる生きた光景を帯びて續いて来た一面を私が定めて無價値を誇り論を唱へて来た。後に念得もる處を虚偽に對する失望を建設に依る疲勞が父鎧した生の生流に實を以て奮起の心になつた。世界へ進もうとして其の結局は空しい努力のうちに否、無意識に生つて不可挽く自己の無力さを感じた。破日より松がたつたのでした。

各個人の使命は人生の真と意を志と探求とある精神的活動にある。そして自己の眞使命を自覚した者は満足を得ることは宗教と科学と藝術と他には無い。

「エエホフ」此言葉が果して眞理であるともれば現在多しき者に依て故はれそうに、私の心は輝く日失つたゴムと道評さる、く自ラ性格の破産者と肯定し或は人生の及遊見と許すだけの勇氣をうり持合せ、つて。

性格上に於て貴方は餘りに懸離れたいと思はれる私はまだ曾て沁る「生きた光景」は故へう小だ記憶を持ちません。生に對して「本末」といふ言ひ可き原型的評價に根拠を配せられある私は固断なく接觸する生を呪詛の前に凱歌を奏し、がう小々自己を敬慕せざる。

知らる、如く私はよく筆の先の愚戯をします。私は敢て愚戯だと言ひます。其が早なる筆と紙との遊戯で眞か私として何事の眞象を帯びたものたうです。眞愚戯とてゐる間は不思議にそ

眞なる私が影を潜めて私の心は是迄経験した種々な人達性格に接して、そして及ぬか、種々の状態さへ味ひながら、創作の中に展開されてゆく全然異つた自己を見、眺めるのです。人生の意義を認め、か、人生の意義を無、言へば思想上の破産者である私が思想上の建設である創作に對し、此許し難い矛盾が経緯となつて私の作品から貴、理想を奪ひ、純な個性を没却させます。だから私の作品は

理想 陽光と生の讚美を産鬼の暗黒に吞まられた灰色の晴形児かので、若しその光の中に理想や讚美の光が没れておたとしてそれは愚愚か遊戯である生に對する私の小さな反抗心が皮肉にも被る色を羨望の假面に外さうかのです。

「藝術は自己表現に終始するに過ぎない」として第一義に唱へることは恥ぢ、そして私の作品の中に自己に似た影を認めることも全然異つた他人の姿に接すること後日の私に良心の奇責として喰ひ込んで来ます。

斯うした痛みの世界に住む私に貴方の詩の因、朝の空気が響きながら、陽光と小島の歌と音楽の歌と、から没れか生の勝利の聲に才六官の辺りまで渡られる何物かがあることは奇蹟と言はねばなりません。貴方は前後二回に亘つて自己の傷みの足痕を来したようです。然し私は其等の中から思はれたる人、溜息を吐いたのみに過ぎません。

「あ、さ、回避者」こそは超人の氣魄なく顔の徹念を、私自身がつて

生命の瞬間の多化から生れたる詩人よ、高うかに詩へ。

嘆息もすることは私の領土です。詩の因の喜悅に没れたる貴方の溜息も聞くことは私の領土に、貴方に賛澤過ぎます。

〇たまきはる命ひかりと、滴つた水は否と、言ひてけぬがによする。

(まはり)

執念 (一幕)

「時」一九九百一年冬の夜  
「場所」東國南部の庄田舎  
登場人物  
盲目の病人 四十七八才  
その娘 マリア 十五六才  
医者 茂波 六十才位

舞台はみすばらしい、其れ木造りの掘立  
て小屋の内部。舞台は中尺より二  
三寸仕切り、上手に入口があり、小で卓  
子と二脚の粗末な椅子がある。下手の  
部屋には、盲目の病人が寝てゐる。鋼  
鉄製の履台と椅子が一脚。そして  
枕もとの台に束ねと、灯の消えた燭  
燭がある。硝子窓を透して外は  
暗黒。物置の扉が閉まる。  
「幕上る」

病人 (微かに) うい、い  
(マリアが、下手の部屋に駆け込み)  
マリア パーッ、パーッ、……どうしたの？  
病人 (驚いて) どうしたの？  
マリア (心配さうに) 少しはいいの？  
(まぶさな、枕もとの燭燭に灯をつけて)  
あ、お、わたし今、お医者様、知れた行ってきた  
のよ。  
病人 (ア、……) どうしたの？  
マリア (ア、……) どうしたの？  
病人 (ア、……) どうしたの？  
マリア (ア、……) どうしたの？

少し怖く、先生、どうしたの？  
マリアの叔父さん、は上手にお医者様、どう  
言ってきたの？  
(その時、病人はふと物置の扉を開ける。  
病人の御首、風が吹く。)  
病人 (ア、……) どうしたの？  
マリア (ア、……) どうしたの？  
病人 (ア、……) どうしたの？  
マリア (ア、……) どうしたの？

病人 (ア、……) どうしたの？  
マリア (ア、……) どうしたの？  
病人 (ア、……) どうしたの？  
マリア (ア、……) どうしたの？  
病人 (ア、……) どうしたの？  
マリア (ア、……) どうしたの？  
病人 (ア、……) どうしたの？  
マリア (ア、……) どうしたの？

病人 (ア、……) どうしたの？  
マリア (ア、……) どうしたの？  
病人 (ア、……) どうしたの？  
マリア (ア、……) どうしたの？  
病人 (ア、……) どうしたの？  
マリア (ア、……) どうしたの？  
病人 (ア、……) どうしたの？  
マリア (ア、……) どうしたの？